

1 章

日本の武道

筑波大学名誉教授

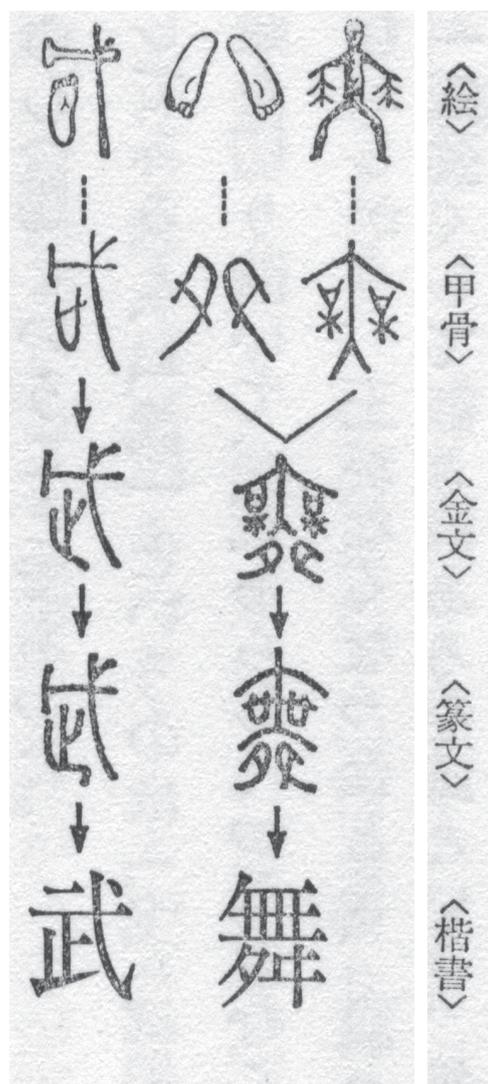
藤堂 良明

◇はじめに

2012年度から全国1万余校の中学校1・2年生で武道が必修化された。一方で、少子高齢化が進むとともに少年少女の武道人口は減少し、喫緊の課題となっている。こうした状況下で、武道の特性を活かした少年少女の指導が望まれるだろう。

そこでまず「武」という字の意味を紹介してみる。「武」のもともとの意味は、「戈（ほこ）+止（あし）」の会意文字であり、武器を手に力強く地面を踏みしめて進む、という意味であった（資料1参照）。これとは反対の解釈もある。「武」とは「戈（ほこ）を止める」という意味であり、悪者の武力を自らの武器で抑止するという解釈である。最後に全く違った解釈もある。「武」は「舞」と同じ意味であり、武器を持って神の前で舞うというものであった。

本章では、こうした「武」の解釈を踏まえながら古代から現代に至るまでの武道の歴史を概観し、武道の特性や現代的意義について考えてみたい。



資料1 「武」の漢字
 (藤堂明保『「武」の漢字「文」の漢字』徳間書店)

◇ 『古代における武』

日本の古代社会は、天皇が祭りを催して神と交信し五穀豊穡ごこくほうじょうをもたらし人々を治めた。こうしたことを刀剣について見てみよう。

刀剣を含む金属器は紀元前3世紀末、日本の弥生時代初めに中国から朝鮮経由で日本に伝えられた。一般に刀剣といわれるが、片刃のものを「刀」といい、両刃で真まっ直すぐなものを「剣つるぎ」つるぎと違って区別した。「剣」は祭器として主に使われ邪悪を排除する神々の象徴として機能したのである。歴代の天皇が受け継いだ「三種の神器」の中には、天皇が使った祭器としての剣があり現代に伝えられている。

一方で、刀は中国式の直刀ちよくとうでありその機能は十分ではなかったのである。弓射は主に狩猟に使われたが、やがて宮廷行事に取り入れられて正月や5月5日に儀式として行われる。相撲たなばたは七夕に庶民の間で農作物の豊作を祈る神事として行われたが、やがて宮廷でも7月の年中行事となった。こうしてみると、古代の「武」は敵を倒す技術よりも神事や儀礼に関わっており、「武は舞である」という意味で機能していたといえる。

◇ 『武士の出現と武術』

平安時代中頃、律令制度による中央集権体制が緩むと、一部の豪族や有力農民は土地を切り開いて武装し戦闘なりわいを生業とする兵つわものが生まれる。一方、都では朝廷や貴族を警護する侍さむらいが現れた。武士の出現である（資料2参照）。彼らは「自立」した生き方を重んじたのであり、その自立を支えたのが武術であった。



資料2 源平合戦図屏風（部分）
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

やがて武士集団が生まれ、西国で力を付けた平氏と東国で力を蓄えた源氏は権力争いを繰り広げる。当時の戦は、相手を威嚇する弓の射合から始まり、矢が尽きると斬り合いに移行し、最後は組み伏せて止めを刺す組討で勝負が決まったのである。

平安中期には、刀は中国式の突くことを主にした直刀から、切ることのできる反りを持った日本刀が作られ優秀な武器となる。武士たちの戦場での心構えは、汚名を着せられることを「恥」と感じ死を覚悟して戦う「勇気」であった。また、対戦相手であっても自立を旨に努力する者であったから、敗者への「思いやり」も大切にされた。こうした戦闘者の生き方を「兵の道」と呼び、武士道の芽生えとなったのである。

1185年、源頼朝は全国に守護・地頭を置き武士の政府「鎌倉幕府」を開く。鎌倉武士は將軍との忠誠を大切に万が一に備えて武術の鍛錬を行った。

日本刀は完成していたが戦いの主役は弓であり、武士のことを「弓矢取るもの」ともいった。中でも馬に乗って弓を射る騎射が重んじられ、両軍が見守る中、優れた武士同士が一对一で騎射の技術を競い合った「一騎打ち」の話は有名である。

1543年に鉄砲が種子島に伝わると戦国武将は鉄砲を取り入れて天下を取ろうと乱世となる。戦争も兵と兵がぶつかり合う白兵戦が重んじられ、武士は鉄砲や刀剣、槍、薙刀、組討などの総合武術を身につけねばならなくなる。まさにこの時代の「武」は「戈（武器）をもって止（あし）で進む」ものであった。

◇ 『江戸幕府と武芸』

関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は江戸幕府を築き（1603年）、戦争のない世の中を求めて、上下の安定を説く儒教を採り入れ士・農・工・商の身分制を敷く。これまで戦闘員であった武士は文武を兼ねて、三民の長として人格を身につけ国（藩）を治める為政者となる。こうした武士の生き方を「武士道」と呼んだのである。武士の子弟は各藩の藩校に通い、儒教により「仁義」や「忠孝」、「礼節」などの武士の徳目を学び、武術によって身心を鍛えたのである。

江戸時代の「武」は、儒教の徳をもって政治を行う（徳治主義）が唱えられ、「戈（武力）を止める」という前提で行われていく。

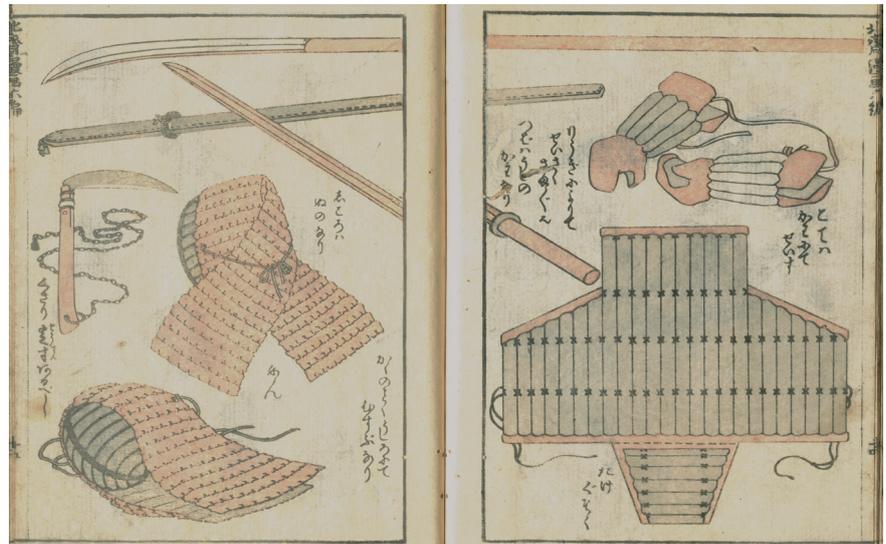
そして、古代から神々の象徴として受け継がれた剣のイメージもあって、弓術にかわって剣術が武術の主流となる。藩校で行われた武術も剣術（30%）が一番多く、以下、槍術、砲術、柔術の順であった。

また、この時代は能や華道などの芸道では「形（かた）」による稽古が行われたが、武術もそうした芸道の方法を取り入れて「形」による稽古を採用する。こうした芸道化の観点から武術が「武芸」と呼ばれるようになり、18種類の武術の総称を武芸十八般といった。特に大坂夏の陣（1615）以降は平和な時代となり、時間に余裕のできた流祖は独自の「形」を編み出して多くの流派が生まれたのである。

武士たちは江戸初期には実戦を意識した木刀による「形」を稽古したが、世の泰平につれ



資料3 葛飾北斎『北斎漫画』(文化11年〈1814〉)に描かれた江戸期の剣術の稽古風景と武具



てぶらぶらと遊び軟弱となる。他流試合も禁じられ、師範もお金で免許を与えるようになり「形」中心の稽古は衰退した。

そこで18世紀中ごろ、^{めん}面や^{こて}小手、^{どう}胴などの道具が工夫され、“しない”を用いて真剣に打ち合う「しない打ち込み稽古」が現れる。柔術も「形」だけでなく、「形」を補完する稽古法として「残り合い」が生まれた。

こうした稽古法の変遷によって幕末期には他流試合も復活し、町人や農民の間でも心気力一致した技をみがいて試合が行われるようになったのである(資料3参照)。

◇ 『近・現代における武道』

1868年、江戸幕府にかわって新政府が誕生し、明治政府は封建諸制度を廃して欧米の文明を導入したため、武士階級は消滅し武芸は旧時代の遺物とみなされ衰退する。

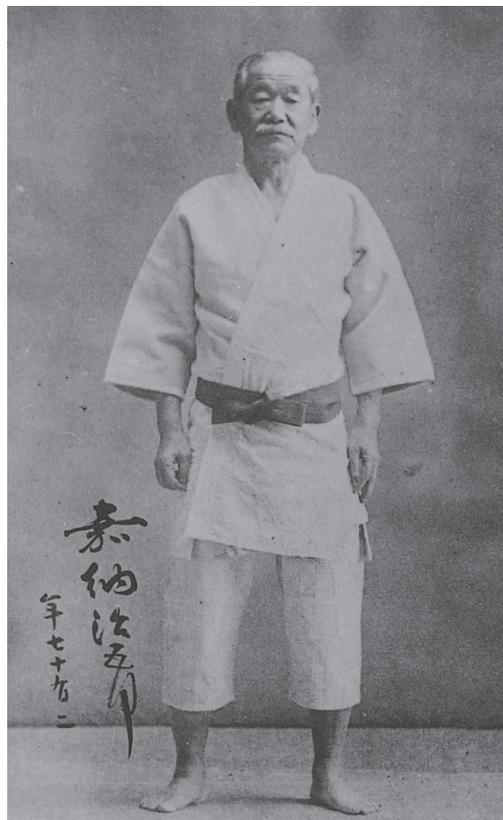
そうした中、武術家に光明を与えたのが山岡鉄舟である(資料4参照)。剣術家の山岡は、「敵と対する時、刀に依らずして心を以て心を打つ」と唱え無刀流を開く。山岡の「剣術は修養である」という考え方は、門弟によって教育論へ活かされた。

嘉納治五郎も廃れていた柔術を修行し、柔術の「残り合い」を改良して、誰もが安全に心身を鍛えられる乱取を^{こしら}え、1882年に講道館柔道を創始する(資料5参照)。そして柔道の目的として、体育(身体の鍛錬)・勝負(武術の習得)・修心(智徳の修養)の三つを掲げ、知・徳・体を備えた立派な人間の育成を^{よみがえ}図った。こうして武道は「人間教育の道」として蘇ったのである。

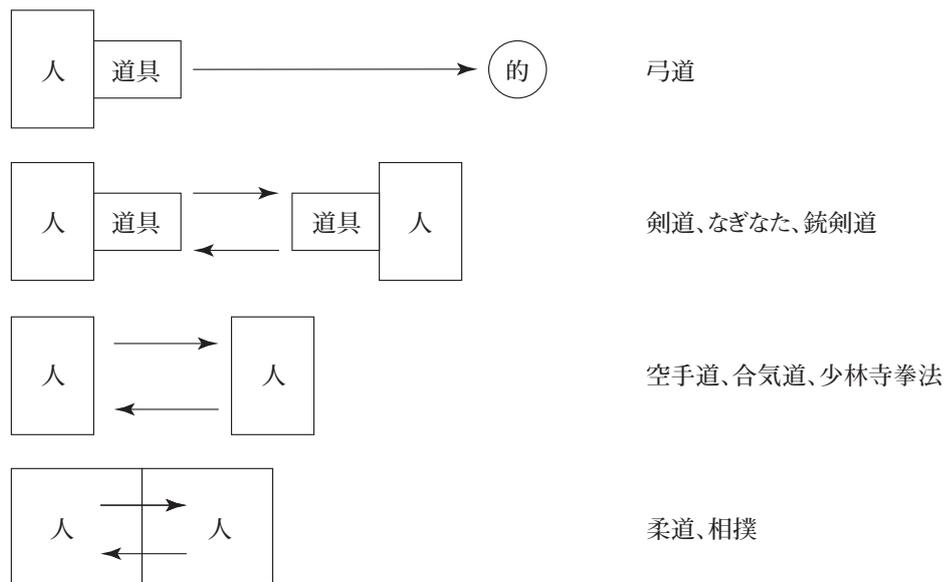
1911年には、剣術や柔道が旧制中学校で生徒の心身鍛練を目的として正課に採用される。やがて、剣術は剣道に弓術は弓道に名称が変わり、1919年に総合名称としての「武道」が定着したのである。満州事変(1931年)以後、日本は戦時色が強くなり武道も国威発揚の方向を余儀なくされる。そして、第二次世界大戦中の武道は軍事的技術とみなされ、戦後の1945年にGHQ(連合軍総司令部)によって武道の名称・実技とも禁止されて存亡の危機に直



資料4 無刀流を開いた山岡鉄舟
出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)



資料5 講道館柔道を創始した嘉納治五郎
(写真 講道館)



資料6 武道9種目における間合いと道具

面した。しかし、スポーツとして再生するという条件で柔道、弓道、剣道の順に学校体育に採用され、各道連盟も復活して普及活動を展開していく。

1964年のオリンピック東京大会を契機に日本武道館が誕生し、武道という名称が復活する。やがて、日本武道協議会が設立され「武道憲章」が制定されて、武道は武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き有為の人物を育成するという目的や進むべき方向が示された。

2012年度からは、武道の伝統的な考え方を理解し行動の仕方を身につけることを目的として「中学校武道必修化」が実現し、9種目の武道を学べるようになったのである(資料6参照)。

しかし、学校で武道を学んだ人たちが社会に出てその精神を発揮しているかは疑問である。武道の指導者は、長い歴史に支えられた武道の特性を活かした指導が望まれている。

◇ 『まとめ』

日本の武道は、かつて戦技であったが技術や道具に改良が加えられて教育の一環として取り入れられるようになった。

その特性としては、他の運動競技はゲームでの勝利が終着点であるが、武道は日々の練習で技を磨き心身を鍛えて、他人との比較ではなく自分自身と向き合い自己を磨くという「道」の思想がある。

また、相手と1対1で勝負するが誰の助けも借りず一人で解決しなければならず、自ら考え行動するという「自立心」が養える。しかも、戦う相手は敵ではなく共に高め合っていく存在であり、勝敗に関係なく自他共に「認め合う」心と「礼儀正しさ」も学べる。私たちは、武道によって少年少女の「技を磨き、心身を鍛えて、立派な人をつくる」という指導を大切にしていかなければならないと考える。